小松文芸賞

〔自由作品〕

寸胴鍋

北野 清三

令和六年正月の

能登半島の大地震で

多くの建物が倒壊した

家財道具などほとんどが

災害ゴミとなってしまった

そんな中で幸運にも

寸胴鍋が無傷のままで見つかった

奇跡である

いや 単に奇跡だと云うだけで

済ませてよいものだろうか

この寸胴鍋が何を思っ

自分の前に現れてきたのだろうか

何か強い意思をもって

出てきてくれたのではな

この寸胴鍋は

今落ち込んでいてどうする

こんな場合だからこそ

これを使って

人々の心の中に元気を

だせる意欲を与えることを

考えたかどうか

と云っているのではないか

この鍋で食べものを作り

テントでも張って

沈んだ心の被災者の皆さんを

元気つけてあげられないか

赤提灯で働いたことのある男が

一念発起した

傷心のまま立ち直れないと云う

被災者たちはよろこんだ

熱々の料理とコップ一杯の酒に

舌鼓を打った

元気がでてくる

おれも前向きに元気をだそう

これは再興の火種になるぞ

そんな声を聞きながら

男は思った

いままで落ち込んでいた

暗黒の心の中に灯った小さな火が

人から人へと転火して

大きな大きな復興の松明となって

夜空を彩ってくれるだろう と